



mechi

Contents

雨粒	3
運河の金魚 (R-18)	11
渴望と無 (R-18)	28
白い花の窓辺	54
忘れて	87
夜明け前の駅	94

雨粒

手の甲にポツリと感じて、見上げた頬に雨粒が落ちた。

みるみるうちにアスファルトに黒い染みが広がり、ザアッと押し寄せる雨音から逃げ込んだ理髪店の軒先には、先客がいた。

胸にトートバッグを抱えたその人は、憂鬱な横顔で空を見上げていた。

予報はにわか雨だったが、いつの間にか、街の稜線が切り取る空に暗い雲が垂れ込めていた。

先客の彼がため息をついた肩を大きく落として、バッグを大事そうに抱え直した時、リュックに入れっぱなしの折り畳み傘を思い出した俺は、リュックの底を漁った。

その傘は数ヶ月前に母さんがくれた物だが、まだ一度も使ったことがなかった。

にわか雨は珍しくなく、傘が煩わしい性分の俺は、普段から滅多に傘を使わない。